「サピエンス全史」(5/5)

文明の構造と人類の幸福

ユヴァル・ノア・ハラリ著
柴田裕之　訳
河出書房新社　2016年9月初版発行
2020年4月79版発行
（まんが版）

著者についての詳細は
https://ja.wikipedia.org/wiki/ユヴァル・ノア...
ネットで「サピエンス全史」を検索しても、要約や図解が多数チェック出来ます。

（上巻）

第1部　認知革命
第　1章　唯一生き延びた人類
第　2章　虚構が協力を可能にした
第　3章　狩猟採集民の豊かな暮らし
第　4章　史上最も危険な種

第3部　人類の統一
第　9章　統一へ向かう世界
第10章　最強の征服者、貨幣
第11章　グローバル化を進める帝国のビジョン
第12章　宗教という超人的秩序
第13章　歴史の必然と謎めいた選択

第2部　農業革命
第　5章　農耕がもたらした繁栄と悲劇
第　6章　神話による社会の拡大
第　7章　書記体系の発明
第　8章　想像上のヒエラルキーと差別

第4部　科学革命
第14章　無知の発見と近代科学の成立
第15章　科学と帝国の融合
第16章　拡大するパイという資本主義のマジック
第17章　産業の推進力

今回は第4部18章～20章を要約してお届けします。
第18章　国家と市場経済がもたらした世界平和
第19章　文明は人間を幸福にしたのか
第20章　超ホモ・サピエンスの時代へ

第18章　国家と市場経済がもたらした世界平和

今日、地球上の大陸には70億近くものホモ・サピエンスが生息している。人類全員の総重量は約3億トンになる。人類が農場で飼っている家畜の総重量は約7億トンになる。対照的にゾウやクジラなど大型の野生動物の総重量は、1億トンにも満たない。世界には15億頭もの畜牛がいるのに対し、キリンは8万頭ほどだ。8億頭もの犬に対し、オオカミは20万頭しかいない。チンパンジーはわずか25万頭であるのに対し、ヒトは何十億にものぼる。

生態系の悪化は、資源不足とは違う。人類が利用できる資源はたえず増加しており、今後もこの傾向は続く可能性が高い。逆に生態系の悪化の懸念は、十分過ぎるほどの確かな根拠がある。将来サピエンスは豊富な新材料とエネルギー源を支配できるようになるかもしれないが、同時に、残っている自然の生息環境を破壊し、他の生物種の大多数を絶滅に追いやるかも知れない。

多くの人が、この過程を「自然破壊」と呼ぶ。だが、実際には、これは破壊ではなく変更だ。自然は決して破壊できない。6500万年前、小惑星の衝突によって、恐竜が絶滅したが、同時に哺乳類繁栄への道を開いた。今日、人類は多くの種を絶滅に追い込みつつあり、自らも消滅させかねない状況にある。だが、非常にうまく適応している生物もいる。ネズミやゴキブリは隆盛を誇っている。こうした強靭な生物たちはおそらく核兵器による最終決戦後に煙の立ち上る瓦礫の下から這い出してきて、待ってましたとばかりに自分のDNAを広めることができるだろう。

近代の時間

多くのサピエンスは、次第に自然の気まぐれに振り回されなくなる一方で、近代産業と政府の命令にはかってないほど支配されるに至った。産業革命は、さまざまな社会工学の試みの実施を次々に可能にし、日常生活と人間の精神構造にさらに多くの想定外の変化を続々と生む結果となった。多くの変化の一例として、伝統的な農業のリズムが画一的で正確な産業活動のスケジュールに置き変わったことがあげられる。

産業革命は、人間社会に何十もの大激変をもたらした。産業界の時間への適応は一例にすぎない。
都市化、小作農の崩壊、工業労働者の出現、庶民の地位向上、民主化、若者文化、家父長制度崩壊など。
これまでに人類に降りかかった重大な社会変革と比べれば、さらに重大な変革がある。それは家族と地域
コミュニティーの崩壊および、それに取って代わる国家と都市の台頭だ。それまでのコミュニティーのほとんどは
血縁社会であった。認知革命や農業革命にも崩壊せずに耐えた血縁社会が産業革命によって分解されて
血縁・地域コミュニティーが果たしてきた役割の大部分は国家と市場に移った。

家族とコミュニティーの崩壊

産業革命以前は、ほとんどの人の日常生活は、古来の三つの枠組み、核家族、拡大家族、親密な地域
コミュニティの中で営まれていた。人々はたいてい、家族で営む農場や工房といった家業に就いていた。
または、近隣の人の家業を手伝っていた。家族は福祉制度であり、医療制度であり、教育制度であり、
建設業界であり、労働組合であり、年金基金であり、ラジオ・テレビ・新聞であり、銀行であり、警察でさえ
あった。
またそれ以外に、王国や帝国もあり、戦争を遂行したり、道路を整備したり、宮殿を建造など大規模な
事業を行った。その事業のために、君主たちは税を徴収したり、ときには兵士や労働者を徴用したりした。
ごくわずかな例外を除けば、君主は家族やコミュニティの日常の営みにはかかわりを持たないことが多かった。
伝統的な農耕経済では、政府の役人や警察官、ソーシャルワーカー、教師、医師といった人々を養うだけの
余剰はほとんど存在しなかった。それらは家族やコミュニティの手に委ねられていた

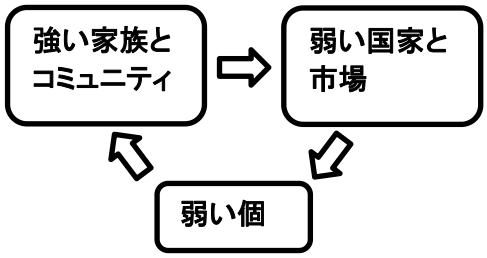
交通と通信の問題から、遠隔地のコミュニティの事柄に介入することはきわめて難しいことが多かったため、
多くの王国が徴税権や処罰権といった最も基本的な君主の特権さえもコミュニティに譲り渡すことを選んだ。
王国や帝国の多くはじつのところ、巨大な用心棒組織と大差なかった。

こうした状況はこの二世紀の間に一変した。産業革命は市場にかってないほどおおきな力を与え、国家には
新たな通信と交通の手段を提供して、事務員や教師、警察官、ソーシャルワーカーといった人々を政府が
自由に活用できるようにした。当初、市場や国家は自らの力を行使しようとすると、外部の介入を快く思わない
伝統的な家族やコミュニティに行く手を阻まれることに気付いた。親やコミュニティの長老たちは、若い世代が
国民主義的な教育制度に洗脳されたり、軍隊に徴兵されたり、拠り所のない都市のプロレタリアートになったり
するのをむざむざと見過ごそうとはしなかった。

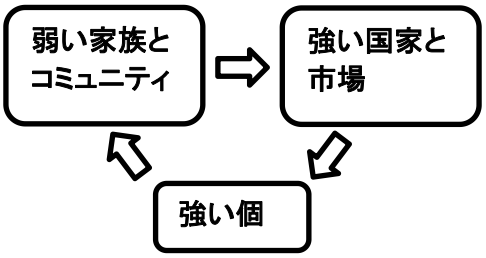
国家と市場はけっして拒絶できない申し出を人々に持ちかけた。「個人になるのだ」と提唱したのだ。
「親の許可を求めることなく、誰でも好きな相手と結婚すればいい。地元の長老らが眉をひそめようとも、何
でも自分に向いた仕事をすればいい。たとえ毎週家族と夕食の席に着けないとしても、どこでも好きな所に
住めばいい。あなたはもはや、家族やコミュニティに依存してはいけないのだ。我々国家と市場が、代わりに
あなた方の面倒を見よう。食事を、住まいを、教育を、医療を、福祉を、職を提供しよう。年金を、保険を、
保護を提供しようではないか。」

ロマン主義の文学ではよく、国家と市場との戦いに囚われた者として個人が描かれる。だが、その姿は
真実とはかけ離れている。国家と市場は個人の生みの親であり、この親のおかげで個人は生きていけるのだ。
個人の解放には犠牲が伴う。強い絆で結ばれた家族やコミュニティの喪失を嘆き悲しみ、人間味に欠ける
国家や市場が私たちの生活に及ぼす力を目の当たりにして、疎外感にさいなまれ、脅威を覚える人も多い。

国家と市場と個人の関係は穏やかではない。国家と市場は、相互の権利と義務に関して異議を唱え、個人は
国家も市場も求めるものは多いのに、提供するものが少なすぎる不満を漏らす。市場が個人を搾取したり、
国家が軍隊や警察、官僚を動員して個人を守るのでなく迫害したりすることも多い。



近代以前の相関関係



近代の相関関係

とはいえ、近代の風景から核家族が完全に姿を消したわけではない。国家と市場は、経済的役割と政治的役割の大半を家族から取り上げたものの、感情面での重要な役割の一部には手をつけなかった。近代に入っても、家族には相変わらず、きわめて私的な欲求を満たすことが期待されており、国家や市場では対応できない。国家は家族関係、とりわけ親子関係に厳しく目を光らせるようになった。たいていの近代以前の社会では親の権威は神聖視されていた。親を敬い、言いつけに従うことが尊ばれる価値観だった。

想像上のコミュニティー

市場や国家は今日、かってコミュニティが満たしていた物質的必要性の大半に応えているが、部族の絆も提供する必要がある。市場と国家はこの要求に応えるために、「想像上のコミュニティ」を育成してきた。想像上のコミュニティは何百万人もの見ず知らずの人の集合体で、国や商業の必要性に合致するように出来ている。想像上のコミュニティは実際には互い者同士が想像力を働かせ、知り合いであるかのように振る舞うコミュニティだ。これは新しい発明ではない。王国も、帝国も、教会も、想像上のコミュニティとして何千年もわたって機能してきた.。古代中国では、何千万もの人々が、自らを皇帝を父とする単一の家族の一員だと考えてきた。

このような想像上のコミュニティの台頭を示す最も重要な例が二つある。国民と消費者という部族だ。国民は各国家に特有の想像上のコミュニティであり、消費者部族は市場の想像上のコミュニティのことをいう。消費主義と国民主義は、相当な努力を払って、厖大な数の見知らぬ人々が自分と同じコミュニティに帰属し、みなが同じ過去、同じ利益、同じ未来を共有していると、私たちに想像させようとしている。貨幣や、有限責任会社、人権と同じように、国民と消費部族も共同主観的現実言える。

国民は、想像の産物であるという自らの特徴を出来る限り隠そうとする。ほとんどの国民が、国民とは自然で永遠の存在であり、原初の時代には母国の土とそこに暮らしていた人々の血を混ぜ合わせて生み出されたといったことを主張する。だが、このような主張は誇張にすぎない。国民ははるか昔に存在していたが、その重要性は現在よりもずっと小さかった。というのも国家の重要性がずっと小さかったからだ。

何も無いもないところから国民を作り上げられるはずがない。イラクやシリアを必死で構築した人々は、実在の歴史的、地理的、文化的素地を活用した。サダム・フセインはアッツバース朝やバビロニア帝国の遺産を取り入れ、精鋭を集結した自らの機甲部隊の一つを「ハンムラビ師団」と名付けさえした。だからといって、イラク国民が古代から続く存在になるわけではない。2ケ月前の小麦粉とオイル、砂糖を使ってケーキを焼いても、ケーキそのものまでが2ケ月前からあったことにはならないのと同じだ。

国民のコミュニティはこの数十年で、消費者部族の前に、次第に影を潜めつつある。消費者部族を構成する人々は、親密な知り合いではないが、同じ消費習慣や関心を持ち、それゆえに同じ部族に一員だと感じて、自分たちをそのように定義する。これはずいぶん奇妙な話に聞こえるが、このような例は多くある。マドンナのファンは一つの消費者部族を形成している。マンチェスター・ユナイテッドのファンも、ベジタリアンも、環境保護論者も消費者部族だ。彼らもまた、何より消費するものによって定義される。

変化し続ける近代社会

この二世紀の変革があまりに急激だったために、社会秩序の根幹を成す特徴にまで変化が起こった。社会秩序とは元来、堅固でゆるぎないものだった。「秩序」は、安定と継続性を含意していた。急速な社会変革は例外的で、社会の変化はたいてい、無数の小さなステップを積み重ねた結果として生じた。人間には,社会構造を柔軟性のない永遠の存在と見なす傾向があった。家族やコミュニティは、秩序の範囲内において自らの立場を変更しようと奮闘するかも知れないが、私たちは自分が秩序の基本構造をを変えられるとは思いもしなかった。「今までもずっとこうだったし、これからもずっとうとこうなのだ」と決めつけて、現状と折り折り合いをつけていた。（**行動経済学、行動心理学ではこれをヒュリステックバイヤスといいます。**）

過去二世紀の間に、変化のペースがあまりにも速くなった結果、社会秩序はダイナミックで順応可能な性質を獲得した。今や社会秩序はたえず流動的な状態で存在する。近代革命といえば、フランス革命やロシア革命を思い浮かべることが多い。じつのところ、最近は毎年のように革命的な出来事が続いている。インターネットが広く利用されるようになったには、1990年代初頭わずか20年ほど前にすぎない。

近代社会の特徴を定義しようとするのは、カメレオンの色を定義するに等しい。確信をもって語れる近代社会の唯一の特徴は、その絶え間ない変化だ。人々はこうした変化になれてしまい、社会秩序とは柔軟で意のままに設計したり、改良したりできるものだと考えている.。とりわけ、第二次世界大戦後の70年について

よくあてはまる。この間に人類は初めて、自らの手で完全に絶滅する可能性に直面し、実際に相当数の戦争や大虐殺を経験した。だがこの70年は、人類史上で最も、格段に平和な時代でもあった。同じ時期にあらゆる過去の時代を上回る経済的、社会的、政治的変化も経ているからだ。新たな柔軟な秩序は激しい武力衝突に陥ることなく、抜本的な構造変化を受け入れ、引き起こすことさえできるようになった。

現代の平和

ほとんどの人は、自分がいかに平和な時代に生きているかを実感していない。1000年前から生きている人間は一人もいない。かっての世界が今よりはるかに暴力的であったことは、あっさり忘れ去られている。重要なのは、私たちが集団全体の苦しみよりも、個人の苦しみに共感しやすい点だ。長大な歴史展開を理解するには、個人の話ではなく大規模な統計値を検討する必要がある。2000年には戦争で31万人が亡くなり、暴力犯罪で52万人が命を落とした。亡くなった人の家族、友人は一生消えない傷を負う。83万人という犠牲者は巨視的な視点に立てば2000年に死亡した5600万人のわずか1．48%にすぎない。その年に自動車事故で126万人・2．25%が亡くなり、81万5000人・1．45%が自殺した。

さらに、2002年、死亡した5700万人のうち、戦争による死亡者は17万2000人、暴力犯罪による死亡者は56万9000人、合計して人間による暴力の犠牲者は74万1000人。自殺者は87万3000人。この年は9．11の翌年、テロやアフガン戦争が取りざたされている時期のこと。殺される人よりも自殺者が多い。

暴力の減少は国家の台頭のおかげだ。身近な犯罪の方が、国際的な紛争よりも多くの命を奪っている。国家がその権力を濫用して自国民を殺害する例があり、20世紀には何億とまでいかなくても何千万人もの人が自国の治安部隊に殺された。その割合とアマゾン奥地の先住民同士の争いで命を落とす割合を比較すると、こちらの方がが高い。民族学者によれば、これらの未開の部族では男性の1/4から半分が財産や女性や名誉をめぐって早晩命を落としているという。

帝国の撤退

1945年以降、国家内部での暴力が減少しているのか増加しているのかについては、見解が分かれるかも知れない。だが、国家間の武力紛争がかってないほどまでに減少していることは誰も否定できない。イギリスは1945年には世界の1/4を支配していた。その30年後、同国の支配地域は、いくつかの島だけになった。同国はその間に、ほとんどの植民地から平和裏に整然と撤退した。マハトマ・ガンジーは彼の非暴力の信念に対して賛辞を与えられるが、少なくともその一部は、実際には大英帝国が受けるべきものだ。

1989年のソヴィエト連邦崩壊は、バルカン半島やカフカス地方、中央アジアにおける民族紛争の勃発はあったものの、さらに平和的に進行した。これほど強大な帝国が、これほど短期間に、かつ平穏に姿を消した例は、これまでに一つもない。

原子の平和（パックス・アトミカ）

これらの諸帝国の後を受けた国家は、戦争に驚くほど無関心だった。ごく少数の例外を除けば。世界の国々は1945年以降、征服・併合を目的として他国へ侵攻することはなくなった。今日では、ローマやモンゴル、オスマントルコのような征服を目的とした軍事遠征は、もはや世界のどこにおいても起こりえない。1945年以降、国連の承認を受けた独立国家が征服されて地図上から消えたことは一度もない。

国家間の戦争は、西ヨーロッパの豊かな民主主義国でのみ姿を消したのだと考えるひとが多い。だがじつのところ、ヨーロッパに平和が訪れたのは、世界各地に平和が広まった後だった。私たちがアラブ世界をとくに平和な地域だとは考えることはほとんどない。だが、アラブ諸国が独立を果たして以降、ある国が他国に全面的な侵略を仕掛けたのは一度きり。1990年にイラクによるクウェート侵攻だ。湾岸戦争を除けば、アラブ諸国同士が全面的に戦火を交えたことは一度もない。

アフリカでは事態ははるかに深刻だ。だが、それでも、紛争の多くは内戦やクーデータだ。1960年代と1970年代にアフリカ諸国が独立を果たして以降、征服を目的として他国に侵攻した例はほとんどない。真の平和とは戦争がないことだけでなく、戦争勃発の見込みがないことを意味する。国際政治の鉄則にによれば「隣り合う二政体は必ず、1年以内に戦火を交えることになってもおかしくない筋書きが存在する。」という。この弱肉強食の掟は、19世紀後期のヨーロッパにも、中世ヨーロッパにも、古代中国にも、古代ギリシアにも当てはまった。

今日の人類は、この弱肉強食の掟を覆している。戦争がないだけでなく、ついに平和が実現したのだ。1年以内に全面戦争になってもおかしくない筋書きを想定しうる政体は、ほとんどない。全面戦争が翌年に勃発

する危険性は今なお、イスラエルとシリア、エチオピアとエリトリア、アメリカとイランのようにいくつかの国のには残されているが、これらは真の世界平和という原則の正しさを立証する例外にすぎない。
この要因には、戦争の代償が劇的に大きくなったことがある。戦争の代償が大きくなる一方で、得られる利益は減少した。現代の富の源泉は物質ではなく、人間の頭脳の中にある。富が物質である場合はイラクのクエート侵攻のような場合に起こる。

戦争が採算に合わなくなる一方で、平和からはこれまでにないほどの利益があがるようにようになった。現代の資本主義経済では、対外貿易や対外投資はきわめて重要になった。平和は特別な配当をもたらす。日本と韓国が友好的な関係にある限り、韓国の人々は製品を日本に売り、日本の株式を売買し、日本からの投資を受けることで、繁栄を謳歌できる。

また、重要な要因として、グローバルな政治文化に構造的転換が起こったことがある。フン族、ヴァイキング アステカ帝国などの首長、王侯、神官などのエリートは戦争ををを善なるものと肯定的に考えてきた。現代は史上初めて、平和を愛するエリート層が世界を治める時代だ。政治家、実業家、知識人、芸術家も戦争は悪であり、回避できると心底信じている。

核兵器による大量虐殺の脅威は、平和主義を促進する。平和主義が広まると戦争は影をひそめ、交易が盛んになる。交易によって平和の利益と戦争の代償はともに増大する。この正のフィードバック・ループは、戦争の歯止めをさらに生み出す。最終的にはあらゆる要因のなかで最大の重要性を持つことになるかも知れない。国際関係が緊密になると、多くの国は独立性が弱まり、どこかの国が単独で戦争を仕掛ける公算が低下するのだ。歴史に対する楽観論と悲観論の双方を満足させるのは、私たち現代人は天国と地獄の両方の入口の前に立ち、双方の玄関口を行ったり来たり落ち着かないでいると、結論することか。

第19章　文明は人間を幸福にしたのか

過去500年間には、驚くべき革命が相次いだ。地球は生態的にも歴史的にも、単一に統合された。経済は指数関数的な成長をとげ、人類は現在。かってはおとぎ話の中にしかあり得なかったほどの豊かさを享受している。科学と産業革命のおかげで、人類は超人的な力と実質的に無限のエネルギーを手に入れた。その結果、社会秩序は根底から変容した。政治や日常生活、人間心理も同様だ。

だが、私たちは以前より幸せになっただろうか。過去5世紀の間に人類が蓄積してきた豊かさに、加えて、新たな満足を見つけたのだろうか？　無尽蔵のエネルギー資源の発見は、尽きることのない至福への扉を開いたのだろうか？　さらには、認知革命以降の7万年ほどの激動の時代に、世界はより暮らしやすい場所になったのだろうか？　もし、そうでないなら、農耕や都市、書記、貨幣制度、帝国、科学、産業などの発達には、いったいどのような意味があったのだろうか？

国民主義者は、私たちの幸福に政治的自決権が欠かせないと考える。共産主義者は、プロレタリアート独裁の下でこそ、万人が至福を得られるだろうと訴える。資本主義者は、経済成長と物的豊かさを実現し、人々に自立と進取の精神を教え諭すことによって、自由市場だけが最大多数の最大幸福をもたらすことができると主張する。

本格的な研究によって、こうした仮設が覆されたらどうなるだろう。これらが全部あり得ないことでどれもそれ以前の社会の方が良かったとなったどうなるのか？　これらは仮想の話にすぎない。これまでの歴史学者はこうした問題に答えることは言うに及ばす、問題を提起することさえ避けてきたからだ。かれら歴史学者は政治、社会、社会的・文化的性別（ジェンダー）、疾病、性行動、食物、衣服などほぼあらゆる事柄の歴史について研究してきたが、それらが人間の幸福に及ぼす影響について問うことはめったになかった。

長期にわたる幸福の研究した例は余りない。学者も、一般人もたいていは良くなってきたと思っている。だが、進歩主義的な見解は説得力に欠けている。すでに見たように、新たな適性や行動様式や技能が生活を向上させたとは限らない。　進歩主義の見方に異を唱える人の一部は、正反対の立場に立つ。彼らは人間の能力と幸福度は反比例すると主張する。あらゆる発明の背後には不吉な影を見出すこのロマン主義的な主張は、進歩を必然とする信念と同じく独善的だ。

中道を行くのが、これらを微妙に修正した立場だ。科学革命まで、持てる力と幸福に明確な相関関係はなかった。中世の農民は狩猟採集民より不幸だったかもしれない。この数世紀の間に人類は自らの能力をより賢明に活用できるようになった。単純化すると、ごく短い期間を対象とした楽観的な評価になる。

1958年～1961年に実施された中国共産党による大躍進政策の期間に、1000万人～5000人の餓死者が出た。人類にとって過去数十年は前代未聞の黄金時代だったが、これが歴史の趨勢の抜本的転換を意味するのか、それとも一時的に流れが逆転して幸運に恵まれたのか、判断するには時期尚早だ。

束の間の黄金期でさえも、実は将来の大惨事の種を蒔いていたことが、やがて明らかになるかもしれない。近代がなしとげた比類のない偉業に得意がっていられるのは、他の動物の運命を考慮しない場合に限られる。

幸福度を測る

これまで私たちは、健康や食事、富などおおむね物質的要因の産物であるかのように幸福を論じてきた。より豊かで健康になれば、人々はより幸せにはずだ、と。だがこれは本当にそれほど自明なことなのか？哲学者や聖職者、詩人たちは幸福の性質について何千年も思案を重ねてきた。その多くが、社会的、倫理的精神的要因も物質的要因と同じように、幸福に重大な影響を与えるという結論に達した。豊かな近代社会に生きる人々は繁栄を謳歌しているにもかかわらず、疎外感や空しさに苛まれているのではないだろうか？私たちよりも貧しかった祖先たちは、コミュニティはや宗教、自然との絆に満足を見出していたのではないか。

この数十年、心理学者と生物学者は、何が人々を真に幸福にするかを科学的に解明するという困難な課題に取り組んでいる。金なのか、家族なのか、遺伝的特質なのか、はたまた徳なのか？　一般に認められている定義によると、幸福とは「主観的厚生」とされる。この見方によると、幸福とは、たった今感じている快感であれ、自分の人生のあり方に対する長期わたる満足感であれ、私が心の中で感じるものを意味する。

主観的厚生について尋ねる典型的な質問表は、「今の自分に満足している」「人生を送ることには大きな価値がある」「将来について楽観的だ」「人生は良いものだ」といった記述に対し、どの程度賛同できるかを0～10の段階で評価するように求める。研究者たちはその後、すべての回答を集計し、回答者の主観的厚生の全般的水準を算出する。このような質問表は、幸福とさまざまな客観的要素を関連付けるために使われる。

歴史学者はこうした調査結果をもとに、過去における富や政治的自由、離婚率などとの相関を検証することができる。民主主義体制下で暮らす人、既婚者がしあわせであったなら、この数十年における民主化の進展は人類の幸福に寄与したと言えるともに、離婚率の上昇はその逆の傾向を示唆していると主張する論拠が得られる。興味深い結論の一つは、富が実際に幸福をもたらすことだ。だがそれは、一定水準までで、そこを超えると富はほとんど意味を持たなくなる。病気は短期的には幸福度を低下させるが、長期的な苦悩の種となるのはそれが悪化の一途をたどり、継続的で心身共に消耗させるような痛みを伴ったものに限られるという。

家族やコミュニティは、富や健康よりも幸福間感に大きな影響を及ぼすようだ。緊密で協力的なコミュニティに暮らし、強い絆で結ばれた家族を持つ人々は、家族が崩壊し、コミュニティの一員にもなれない人々よりも、はるかに幸せせだという。結婚生活はとりわけ重要だ。良好な結婚生活と高い主観的厚生、そして劣悪な結婚生活と不幸の間にに、きわめて密接な相関関係があることは、研究によって繰り返し示されている。この相関は、経済状況ばかりか、健康状態とさえ関係がない。貧しいうえに病にふせっていても、愛情深い配偶者や献身的な家族、温かいコミュニティに恵まれた人は、その貧しさの程度があまりにひどかったり、病が悪化する一方だったり、痛みが強かったりするのでなければ、孤独な億万長者よりも幸せだろう。

そんなことは、多くの心理学者が質問表を使って発見するまでもないというかもしれない。たしかに、預言者や詩人や哲学者は何千年も前に、持てるものに満足するほうが、欲しいものをより多く手に入れるよりもはるかに重要なことは見抜いていた。だが、現代の研究が昔の人々と同じ結論に達するのは喜ばしい。人間の期待が決定的に重要であることは、幸福の歴史を理解する上で広範な意味合いを持つ。

幸福が主観的な期待に基づくという知見を得たことで、歴史学者の仕事は格段に難しくなった。私たち現代人は、鎮静剤や鎮痛剤を必要に応じて使えるものの、苦痛の軽減や快楽に対する期待があまりにも膨らみ、不便さや不快さに対するこらえ性がはなはだ弱まったために、おそらくいつの時代の祖先よりも強い苦痛を感じていると思われる。このような考え方にすんなりとは受け入れがたい。他の人々が現在どれほどしあわせであるか、過去の人々がどれほどしあわせだったかを推察したり、想像したりするとき、私たちは必ず相手の立場に立って考えようとする。この方法は、他人の物質的な諸条件に自分の期待を押し付けてしまうため、うまくいかない。

幸せかどうかが期待によって決まるのなら、私たちの社会の二本柱、マスメディアと広告産業は、世界中の満足と蓄えを図らずも枯渇させつつあるのかもしれない。第三世界における不満はおそらく、貧困や疾病、腐敗、政治的抑圧ばかりでなく、先進国の標準に接することによって助長されうるのではないだろうか？

化学から見た幸福
社会学者たちは主観的厚生について尋ねる質問表を配布した。生物学者もおなじ質問表を活用するが、得られた回答を生化学的要因や遺伝子的要因と結びつける。そこから判明した事実は衝撃的だ。

生物学者の主張によると、私たちの精神的・感情的世界は、何百万年もの進化の過程で形成された生化学的な仕組みによって支配されているという。他のあらゆる精神状態と同じく、主観的厚生も給与や社会的関係、あるいは政治的権利のような外部要因によって決まるのではない。神経や、ニューロン、シナプス、さらにはセロトニンやドーパミン、オシシトシンのようなさまざまな化学物質から成る複雑なシステムによって決定される。

人間を幸せにするのは、ある一つの要因、しかもたった一つだけの要因だけであり、それは体内に生じる快感だ。人間の血流に乗って全身を駆け巡っているさまざまなホルモンや、脳内のあちこちで激しくやりとりされている電気信号に反応しているのだ.。人間の体内の生化学システムは、幸福の水準を平均的安定した状態に保つようにプログラムされているらしい。生化学者の大部分は狂信的な主張をしているわけではない。彼らは、幸福は主に生化学によって決定されると述べており、心理学的要因や社会学的要因にもそれぞれの役割があることを認めている。

人生の意義
私たちを当惑させるハックスリの世界（オルダス・ハクスリのSF小説「すばらしい新世界」）は、幸せと快感は等しいという生物学的前提に基づいている。幸せであるとは、肉体的な快感を経験することにほかならない。快感の強度や持続時間が生物学によって制限されていることを思えば、人々が長期にわたって高い水準の幸福を経験するためには、生化学システムを操作する以外に方策はない。

だが、この幸せの定義に異議を唱える学者もいる。ノーベル経済学賞を受賞したダニエル・カーネマンは、ある有名な研究で、人々に典型的な平日について、具体的な出来事を順番に挙げて説明し、それぞれの瞬間がどれだけ楽しかったか、あるいは嫌だったかを評価するように求めた。すると、自分の日常生活について、多くの人々の見方の中に一見して矛盾しているいるように思われる点が見つかった。カーネマンの研究から、喜びを感じる時と、単調な苦役だと感じる時を数えあげてみると、大多数の親は子供の養育は相当の不快な仕事であるとしながら、子供こそ自分の幸福の一番の源泉であると断言する。

人々が自分の人生に認める意義は、いかなるものもたんなる妄想にすぎない。幸福は本当に自己欺瞞あってのものなのだろうか？

汝自身を知れ
幸福が快感を覚えることに基づくのなら、より幸せになるためには、生化学システムを再構築する必要がある。より幸せになるためには、私たちはより効果的に自分自身を欺く必要がある。この他に道はあるだろうか？
自由主義が神聖視するのは、個人の主観的感情だ。自由主義は。こうした感情を権力の至上の源泉と見なす。物事の善悪、美醜、是非はみな、私たち一人一人が何を感じるかによって決定される。

自由主義の政治は、最も賢明なのは有権者なので、私たちにとって何が良いことなのかを「ビッグ・ブラザー」（**ジョージ・オーウェルの小説「1984年」に登場する独裁者**）に教えてもらう必要はないという考えに基づいている。
ルソーいわく「私が良いと感じるものはよい。私が良くないと感じるものは良くない。」
幼児期からこのような言葉に育てられた人間が、幸福は主観的感情であり、自分が幸せであるか、不幸であるかは、本人が一番知っていると考える傾向にある。歴史上、大半の宗教やイデオロギーは、善や美、正義について、客観的な尺度があると主張してきた。凡人の感情や嗜好には信用していなかった。
デルポイのアポロン神殿の入口では「汝自身を知れ」という碑文が巡礼者たちを迎えた。これは暗に、普通の人は自分自身の真の姿を知らず、それゆえ真の幸福についてもおそらく無知であることを示唆していた。

キリスト教の神学者も同じ意見だと思われる。宗教や哲学の多くは、幸福に対して自由主義とは全く異なる探求方法を取ってきた。幸福に対する生物学的な探求方法から得られた基本的見識を、仏教も受け入れている。仏教によれば、苦しみの根源は苦痛の感情でも、悲しみの感情でもなく、無意味さの感情でさえないという。苦しみの真の根源はつかの間の感情を果てしなく、空しく求め続けることなのだ。

歴史書のほとんどは、偉大な思想家の考えや、戦士たちの勇敢さ、聖人たちの慈愛に満ちた行い、芸術家の創造性に注目する。だが、彼らはそれが各人の幸せや苦しみにどのような影響を与えたかについては何一つ言及していない。人類の歴史理解にとって最大の欠落といえる。この欠落を埋める努力を始めるべきだろう。

第20章　超ホモ・サピエンスの時代へ

本書は歴史を、物理的現象から化学的現象、生物学的現象へと連なる連続体の次なる段階として提示するところから始まった。サピエンスは、どれだけ努力してもどれだけ達成しようと、生物学的に定められた限界を突破できないというのがこれまでの暗黙の了解だった。

だが21世紀の今、これは真実ではない。ホモ・サピエンスはそうした限界を超えつつある。ホモ・サピエンスは自然選択の法則を打ち破り始めており、知的設計の法則をその後釜に据えようとしているのだ。
過去40億年近くにわたって、地球上の生物は一つ残らず、自然選択の影響下で進化してきた。

何十億年もの間、知的設計などという選択肢は存在しなかった。ものを設計できるだけの知性が存在しなかったからだ。古来の選択の体制に最初の亀裂が生じたのは農業革命の間のおよそ1万年まえのことだった。ニワトリの品種改良は自然界には存在しないニワトリの血統で、神ではなく人類の知的設計の産物だった。

本書の執筆時点で、知的設計は以下の3つのどの形でも自然選択にとって代わりうる。すなわち、生物工学、サイボーグ工学（有機的器官と非有機的器官との組み合わせ）、そして非有機的生命体だ。
ブラジルの「バイオアーティスト」のエドアルド・カッツは2000年に、斬新な芸術作品を創造することにした。蛍光性の緑色のウサギだ。ウサギのDNAにクラゲから取った遺伝子を移植した。そして緑色の耳をしたウサギが誕生した。

マウスとヒトの合成

生物工学とはエドアルド・カッツの芸術面での好みのような、人間文化に由来する、あらかじめ抱いていた何らかの概念を実現するために、生物の形態や能力、欲望の改変を目指す、生物学的レベルでの人間の意図的介入のことをいう。生物工学そのものには何一つ新しい所はない。人々は何千年にもわたって生物工学を利用してきた。牛の去勢だけでなく、人間の去勢もしてきた。近年は外科的手段とホルモンを使った性転換も行われている。

1996年、マウスにウシの軟骨を移植し人間の耳に似たものにすることが出来た。遺伝子工学によってさらに驚くことができるかも知れない。だからこそ、倫理、政治、イデオロギーの問題が多数発生しているのだ。しかも、人類が神の役割を強奪するのに異を唱えるには、敬虔な一神教とばかりではない。多くの根っからの無神論者も、科学者が自然にとって代わるという発想に衝撃を受けている。

ネアンデルタール人の復活

遺伝学者の願いは、今生きている生物を改変することにとどまらない。彼らは絶滅した生物を蘇らせることも目指している。ロシアと日本と韓国の科学者がシベリアの凍土から古代マンモスのゲノムを解析した。そしてマンモスの復元を計画している。だが、マンモスで終わりにする必要があるだろうか。ハーバード大学のジョージ・チャーチ教授はネアンデルタール人ゲノム計画が完了したので、今や私たちはネアンデルタール人の子供を3万年ぶりに誕生させられると述べた。だが、ネアンデルタール人で終わりにする必要さえないのでないか？神の製図版にまでさかのぼって、もっと優れたサピエンスを設計すればいいのでないか。

私たちが超人を生み出すのを妨げる、克服不可能な技術的障害はないように見える。主な障害は倫理的な異議や政治的な異議であり、そのせいで人間についての研究が後れている。倫理的な主張は、たとえどれほど説得力を持っていても、次の段階に進むのをあまり長く防げるとは思えない。人間の寿命を際限なく引き延ばしたり、不治の病に打ち勝ったり、認知的な能力を向上させたりする可能性にかかっている場合はなおさらだ。たとえば、健康な人の記憶力を劇的に高める余禄まで伴うアルツハイマー病の治療法を開発するとしたら、どうなるか？それに必要な研究を止められる人などいるだろうか？

生物工学で本当にネアンデルタール人を再生できるかどうかははっきりしないが、ホモ・サピエンスという存在に幕を下す可能性は非常に高い。私たちの遺伝子をいじくりまわしても、必ず私たちの生命が奪われるとは限らない。だが、あまりにホモ・サピエンスに手を加えすぎて、私たちはもはやホモ・サピエンスではなく可能性はある。

バイオニック生命体

生命の法則を変えうる新しいテクノロジーは他にもある。サイボーグ工学もその一つだ。サイボーグは有機的な器官と非有機的な器官を組み合わせた生物で、たとえば、バイオニック・ハンド（義手）を装着した人間がそれに当たる。ある意味で、現代人はほぼ全員がバイオニックだ。私たちの生来の感覚や機能は、眼鏡やペースメーカー、矯正器具、はてはコンピューターや携帯電話まで、さまざまな装置によって補強されている。

アメリカ軍の研究機関である国防高等研究計画局（DARPA）は、昆虫のサイボーグを開発している。電子チップや探知機、プロセッサーをハエかゴキブリの体内に埋め込み、それを使って人間あるいは自動オペレーターが動きを遠隔操作し、情報を収集・送信できるようにするという発想だ。また、2006年アメリカの海軍水中戦センターがサメのサイボーグを開発する意図を発表した。政府が資金提供のドイツのレティナ・インプラント社は目の不自由な人が部分的に視力を獲得することができる網膜プロテーゼを開発している。

別の生命

コンピュータープログラムの領域では、遺伝進化の手法を模倣する試みがなされている。作り手から完全に独立して、自由に学習したり進化したりできるプログラムを生み出すことを夢見ている。それが実現すれば、プログラマーはプリムム・モビーレ、すなわち原動力ではあっても、その創作物は、創作者も他の誰もが予想しえなかった方向に自由に進化することになる。そのようなプログラムのプロットタイプがすでに存在する。コンピューターウィルスだ。それらは生き物なのだろうか？それは「生物」という言葉の定義次第だ。

別の可能性も想像してほしい。持ち運びのできるハードディスクにあなたの脳のバックアップを作り、ノートパソコンでそれを実行したとしよう、そのノートパソコンはサピエンスとまったく同じように考えたり、感じたりできるだろうか？それはあなたなのか、それとも別なのか？

特異点（シンギュラリティ）

現時点ではこれらの新しい可能性のうち、ほんの一部しか実現していない。だが2014年の世界では、文化がすでに生物学の軛から自らを解き放ちつつある。周囲の世界ばかりか、ほかならぬ自分の身体や心の内側にある世界さえも操作する私たちの能力は、猛烈な速さで発達している。ますます多くの活動分野が、現状で満足してはいられなくなっている。法律家はプライバシーとアイデンティティの問題を考え直さなければならず、政府と医療と平等の問題の再考を迫られ、スポーツ団体や教育機関はフェアプレーと成績を再定義する必要がある。年金基金と労働市場はかっての30歳に相当しうる世界に適合するように再調整せざるをえない。誰もが生物工学やサイボーグ、非有機的生命の難問に対処しなくてはならない。

フランケンシュタインの予言

1818年、メアリー・シェリーは「フランケンシュタインあるいは現代のプロメシュース」を発表した。ある科学者が人造人間を生み出すが、それがいうことを聞かなくなって、惨事を引き起こすという物語だ。過去2世紀の間、同じ物語が形を変えて何度となく語られてきた。それは私たちの新しい科学神話にとって、重要な柱となった。一見するとフランケンシュタインの物語は、もし私たちが神の真似をして生命を創り出そうとしたら、厳しい罰を受けるだろうと警告しているように思える。だが、この物語にはもっと深い意味がある。

フランケンシュタイン博士が恐ろしい怪物を生み出し、自らを救うために私たちがその怪物を抹殺しなければならなかったという発想に、私たちはなぜかほっとする。私たちがそういう形でこの物語を語りたがるのは、私たちこそが最高の存在で、自分たちに優る存在はかってなかったし、今後も決して現れないだろうことをそれが意味しているからだ。私たちを改良しようとする試みは必ず失敗に終わる。たとえ、私たちの肉体を改良出来ても、人間の精神には手をつけられないからだ。

私たちに試みることができるのは、科学が進もうとしている方向に影響を与えることだ。私たちが自分の欲望を操作できるようになる日は近いかもしれない。私たちが直面している真の疑問は、
「私たちは何になりたいのか？」ではなく「私たちは何を望みたいのか？」かもしれない。
この疑問に思わず頭を抱えない人は、おそらくまだ、それについて十分考えていないのだろう。

あとがき―　神になった動物

7万年まえ、ホモ・サピエンスはまだアフリカの片隅で生きていくのが精一杯の、取るに足らない動物だった。その後の、年月に、全地球の主となり、生態系を脅かすに至った。今日、ホモ・サピエンスは神になる寸前で、永遠の若さばかりか、創造と破壊の神聖な能力さえも手に入れかけている。

過去数十年間、私たちは飢饉や疫病、戦争を減らし、人間の境遇に関してはようやく多少なりとも真の進歩を遂げた。とはいえ、他の動物たちの境遇はかってないほどの速さで悪化の一途をたどっているし、人類の境遇の改善は余りにも最近の薄弱な現象であり、決して確実なものではない。人類は自分自身の快適さや楽しみ以外はほとんど追い求めないが、それでも満足できずにいる。自分が何を望んでいるかも分からない。不満で無責任な神々ほど危険なものがあるだろうか？

5回にわたって、ご紹介してきました。上巻下巻合わせて500ページを超える大作を5回に分けると、
1回あたり、100ページを10ページ弱に要約してきたことになります。
ここには欧米の文化圏と、アジアの漢字文化圏の垣根を越えた厖大な歴史的事例が紹介されています。

最新の科学技術情報、社会問題、国際政治、心理学、哲学、芸術など広い視野での著述は見事です。

その内容、量には感服しています。お時間がありましたら是非、図書館、書店で見付けて読んでください。

著者は欧米から見て新鮮に見える「禅」の思考法や認識法を多く取り上げています。
著者が漢字文化や日本の古典にに通じていればもっと面白い内容になっていただろうと思います。

別の見方をすれば、中国の古典（四書五経など）や、日本の古典（万葉集、源氏物語・・・）や
日本の近代哲学（善の研究、風土・・・）などの思考や認識のユニークさを感じられます。

第18章　の中の「想像上のコミュニティ」の記述は大変現実的で、示唆に富んだ内容でした。
伝統的な農耕社会は地縁・血縁のコミュニティであったのに対し、工業化社会では職縁・社縁の
コミュニティであったとすると、商業社会・情報化社会のコミュニティは「個人の趣味嗜好・主義主張」で
まとめられた緩いコミュニティだという。 KIPAという協会コミュニティがまさにそれであり、
地域住民の自治会が地縁・血縁のタガでまとまっていたものが弱体化し、崩壊の危機に
あるのも時代の流れ、人心の変化傾向なのかとも納得しました。

（T.K.）